

現代では、「信仰」というと「宗教」と同じものと捉えられがちです。しかし、本来「信仰」とは、人々の生活の中におけるちょっとした願いや祈り、あるいは仕事のコツを説明したり、珍しい風景を理解したりしていくための伝説などが、姿を変えて伝えられたものであったのかもしれない。そういった信仰のひとつとして、前回は安曇川の水神について考えてみました。今回は安曇川流域独特の「シコブチ明神」信仰についてみてみます。

呼び方には「シコブチ明神」の他に「シコブツツアソ」・漢字で書くと「思古淵」「志子淵」「信興淵」などが当てられます。「シコブチ」のもともとの意味は不明ですが、壬申の乱(672)に天武天皇の下で活躍した忌部宿禰色非を当てる説や、「醜淵」「地獄淵」など「恐ろしい場所」を示すという説、カッパの別名である「水虎」がなまったものだとする説などがあります。その性格としては、地名である「葛川」の「葛」を川や淵にゆかりの深い「九頭竜」、すなわち水神と見る説があります。鎌倉時代前期の『葛川縁起』によると、シコブチ明神は安曇川流域の開拓の祖神・地主神と考えられています。シコブチ明神は貞観元(859)年、比叡山回降行の始祖・相応和尚の葛川入峰の時にこの地を和尚に譲り、使い魔である淨鬼(常喜)・淨瀧(常満)両童子に命じて、和尚を不動明王の靈瀑三の滝に導かせます。葛川明王院建立後は、伽藍鎮守になったとされています。この伝承について

は、流域の村人の山林所有権が、相応和尚の行場開拓によって天台宗側に移ったことを示している、との解釈もあります。

ところが安曇川流域では、この「シコブチ明神」は少し違った形で信仰されています。この地域での「シコブチ明神」は、筏乗りの祖神なのです。大津市の思子淵大明神(葛川坂下)、信興淵大明神(葛川坊村)、志子淵神社(葛川梅ノ木)、高島市の思子淵神社(朽木小川)、志子淵神社(朽木岩瀬)、思子淵

思子淵神社

神社(安曇川町中野)、安曇川の支流久多川の京都市左京区の志古淵神社(久多中の町)の7カ所は「七シコブチ」と言われ、シコブチ明神を祀る主要な社として信仰を集めています。なお、葛川では主神として祀っているのは梅ノ木の志子淵神社だけで、坊村では地主神社、坂下では愛宕神社の境内社としてシコブチ明神が祀られています。また、安曇川の最上流である京都にも左京区大原大見町、同百井町にもシコブチ明神を祀る社があり、広く分布していることがうかがわれます。

筏乗りの祖神としてのシコブチ明神には、次のような伝承があります。かつてシコブチ明神は、「遅越の続きヶ原」(大津市葛川梅ノ木町の奥山のオカイ野)で息子とともにもに筏を組み、その端に息子を乗せて、筏を組み継ぎつつ安曇川に流していました。ところがある時、筏が突然止まってしまったので調べてみると、「金山淵」という大きな淵の岩に衝突していました。しかも息子がいないので水中を捜すと、淵の底で、カッパが息子を抱きかかえてひそんでいました。シコブチ明神は



思子淵神社

カッパをいさめて息子を救い、ふたたび筏を流します。ところが「中野の赤壁」(高島市安曇川)という大淵に至ると、またもカッパが筏を止め、怒ったシコブチ明神はカッパを水中から引き出して縛りあげ、今後何があっても「昔の義経をつげ、香蒲の脛巾をはぎ、辛夷の竿をもった者」には一切危害を加えないことを誓わせました。その時、自分の持っていた杉の杖を地面に突き立てました。それが「中野の逆さ杉」になったといわれています。

この伝承は安曇川の筏乗りたちに代々伝えられ、彼らは祖神が川の魔物を封じてくれた徳をたたえて、旧暦10月7日に「シコブチ講」として盛大なまつりを行ってきました。筏乗りの安全を祈り、装束を規定し、気をつけるべき場所を示し、珍しい景観の説明をつける。「シコブチ明神」の信仰は、古くは高島の杣で代表される安曇川流域の林業に生きる、まさに人々の暮らしに直結した信仰の姿といえるでしょう。

(滋賀県文化財保護協会
阿刀弘史)

暮らしに息づく「シコブチ明神」